

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：23902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00197

研究課題名（和文）国営アニメーションスタジオの風刺画受容に関する比較研究 - エストニアを中心に

研究課題名（英文）Comparative study of caricature acceptance of National animation studio:
focusing around Estonia

研究代表者

有持 旭 (Arimochi, Akira)

愛知県立芸術大学・美術学部・教授

研究者番号：30759783

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：ザグレブ・フィルムの『アニメーション学の17つの基本原則』を入手したり、聞き取り調査による分析によって、ザグレブ・フィルムとタリンフィルムにおける相互影響や各スタジオの活動や風刺画との関係がどのように確立されたのか、その歴史の基礎を明らかにした。この結果、東欧アニメーションのなかでエストニア・アニメーション史を再解釈することができ、民族誌的アニメーションという領域を開拓した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日の世界情勢の動乱時に、変革期エストニアにおける芸術文化の史実、それに関与する東欧諸国の風刺活動を捉え歴史を再解釈した本研究は、時代性を持った美術史として学術的かつ社会的意義がある。そして、ソ連時代のアニメーションや風刺画に関する資料が少ないなか、曖昧な当時の状況について明確にしたその歴史は、今後の東欧アニメーション史研究の基盤となる。また、それは社会主義における視覚芸術論の進展に繋がる。

研究成果の概要（英文）：By obtaining Zagreb Film's "17 Basic Principles of Animation Studies" and analyzing interviews, I have clarified the basics of the history of Zagreb Film and Tallinnfilm, including how the mutual influence between Zagreb Film and Tallinnfilm, the activities of each studio, and the relationship with cartoons were established. As a result, I was able to reinterpret the history of Estonian animation within the context of Eastern European animation, and pioneering the field of ethnographic animation.

研究分野：アニメーション

キーワード：アニメーション 風刺画 エストニア クロアチア オーラル・ヒストリー 比較美術史 国営アニメーションスタジオ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

エストニアは、ソ連時代に限らず古くから地政学的な領土問題に悩まされてきた。しかし Skype の発明以降、ポスト・インターネットを推進する独自の生き方を作り上げている。この特異な歴史と文化形成を持つエストニアでは独立以前に風刺画が描かれてきた。そして、当時の風刺画家の多くは、アニメーション作家に転向した(有持旭, 2017)。こうしたエストニアにおけるアニメーションと風刺画の関係に関する研究成果は、他にも世界に僅かにある。例えば、論考ではないが 2006 年エストニア国外で初めて、エストニア・アニメーション作家の 20 人が紹介された(C. Robinson, *Estonian Animation*)。その後 2015 年には、世界アニメーション史の中で概略的に触れられた(G. Bendazzi, *Animation: A World History Volume 1D*)。また、エストニア国内では、風刺画に関する初動的な論(M. Laaniste, 2009)やアニメーション作家による基本的なアニメーションの歴史や技法に関する論(Ü. Pikkov, 2010)が発表された。これらは継続的な研究として行われていないが、エストニア芸術史を研究する者にとって大きな指針となっている。

しかし、ソ連時代のアカデミズム以外のエストニア芸術(風刺画やアニメーション、前衛芸術など)の文献資料はあまり残っていないため、未だ世界で具体的な研究がなされていない。こうしたことから、近年までアニメーションと風刺画の領域間による関係は、芸術史のなかで信憑性の高い史実が明らかに記されてこなかった。

こうしたなか、本研究代表者はこれまで現地での2年間のフィールドワークを母体とし、その後3年間エストニア・アニメーションの歴史研究を行ってきた。その結果、これまで不明瞭だったエストニアにおける「アニメーションと風刺画」及び「アニメーションとシュルレアリスム」の緊密な関係について明らかにした。このような継続的な調査によって、エストニアのアニメーションが、他の東欧諸国の風刺画から多くの影響を受けていることも新たにわかってきた。

2. 研究の目的

本研究代表者はこれまでに、エストニア・アニメーションの歴史を整えるため、資料収集やオーラル・ヒストリーを行い、これら一次資料を用いて史実を少しずつ明らかにし、それを基にアニメーション理論を提示してきた。本研究の目的は、これまでの研究を深めるために、エストニアとクロアチアにおける国営アニメーションスタジオの風刺画受容を明らかにすることである。また、その発展として、エストニア・アニメーションを東欧アニメーションのなかで再解釈し、「民族誌的アニメーション」という領域を開拓し基盤を作ることである。

3. 研究の方法

研究期間の5年間(コロナ禍の影響で3年を5年に延長した)における共通した方法は、文献調査及び作家や映画祭ディレクターなどへの聞き取り調査による資料収集とその分析である。まず、エストニアの国営アニメーションスタジオであった「タリンフィルム」とクロアチアの「ザグレブ・フィルム」に関して文献調査を行った。その後、タリンフィルムとザグレブ・フィルムにおける初期の歴史を照らし合っながら、当時スタジオで何が起こっていたのか、ということを実証者の証言をもとに調査した。また、二つのスタジオで製作されたアニメーションにみられる風刺画の影響とそのユーモアの質に関して資料をもとに検証した。

コロナ禍による渡航制限が大きく影響し、また、想定以上にクロアチアでの調査資料が多かったため、エストニアによるポーランドの風刺画受容を明らかにすることを早期に断念した。コロナ禍が明けて以降、エストニアとクロアチアの国営スタジオにおける風刺画受容を明らかにすることに注力した。

4. 研究成果

エストニアでの調査研究

エストニアの芸術文化雑誌や文芸新聞『Sirp ja Vasar』の1987年の1年分の新聞などを入手することができた。これらにより、これまで知ることのなかった風刺画作品を確認することができた。また、収集した風刺雑誌『Pikker』に掲載されている風刺画をデータ化する作業を継続的に行った。さらに、アニメーション作家プリート・パルンのタルトゥ大学におけるアニメーション講義動画、全12つ(1つあたり3時間半)を翻訳しデータ化した。その後それを分析した。そのうち講義「ストーリー」に関する分析結果は、日本映像学会中部支部研究会で発表した。また「スタイル」と「シュルレアリスム」と「アニメーション技術」に関する分析は、東京藝術大学大学院の公開講座「パルン学派?エストニアに学ぶ作家たち」にて一部公開した。

芸術史の体系化として、風刺画やアニメーション、パフォーマンス、メディアアートといった潮流を経てきたこの国の特徴を把握し、アニメーション表現が歴史の中でどういったポジションを取っていたのかを明らかにした。その成果は日本映像学会第47回大会にて発表した。全体を把握したのち、レイン・ラーマツト(タリンフィルム内に平面アニメーション部門「ヨーニスフィルム」を設立したアニメーション作家)の自伝本を翻訳した。その後、ラーマツトに聞き取り調査を行った。その結果、タリンフィルムでアニメーション製作に招集された画家を把握し、スタジオでの職務や交友関係、風刺画家や画家をアニメーション製作に参加させた動機や経緯、そしてタリンフィルムとザグレブ・フィルムとの関係についても知ることができた。ラーマツトとともにスタジオの初期から所属していたパルンにも聞き取り調査を行い、タリンフィルムにおける風刺画受容に関して、そのユーモアとナラティブの関係の構築がどのように確立されたのか、適例として作品『Kolmnurk』と『Porgandite öö』を分析し解明した。

風刺画受容とは相反するパルン作品『ja teeb trikke』を例として、アニメーションのメタモルフォシスに関する論文を日本映像学会の学会誌に投稿した。その一方で、エストニア・アニメーションのユーモアの質について風刺画家であったパルンの芸術活動および発言を基にパルンの思考を分析した。その結果を現代アニメーション研究の国際会議Animafest ScannerXI(クロアチア、2024年6月)で「Pärn's Humor: Talking in the Fog」として国際的に発表した。この発表で「民族誌的アニメーション」という領域を開拓している研究者がいることを示すことができた。

クロアチアでの調査研究

実地調査ができなかった期間は、ザグレブ・フィルムに関して「東欧アニメーション」という枠組みで国内で入手できる概略的な文献を基に調査し、歴史の整合性を確認した。また、「ザグレブ・フィルム60周年」展については、現地の研究補助員の協力による会場風景の写真と動画、およびカタログを基にザグレブのアニメーション史と風刺画の関係を確認できた。

渡航が可能になってからの実地調査では、ザグレブ国際アニメーション映画祭の特集「Zagreb School」およびザグレブ現代美術館で開催されたAnimafest Zagreb展による資料を分析した。これらはかなりの量であり、資料分析に多くの時間を要した。また、ヨシュコ・マルシッチ(ザグレブ・フィルムの元アートディレクター、ザグレブ大学芸術アカデミーのアニメーション・ニューメディア専攻設立者)に聞き取り調査を行い、マルシッチが作成した『アニメーション学の17つの基本原則』という資料を拝受することもできた。これらにより、当時の国営アニメーションスタジオ「ザグレブ・フィルム」の活動や風刺画との関係、そしてタリンフィルム作品との関係について多くの史実を知ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 有持旭	4. 巻 52
2. 論文標題 アニメーションにおけるメタモルフォシスの役割と作用：ブリート・パルン及びミシェル・クルノワイエ作品と諸視覚芸術の比較分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 愛知県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 133-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34476/00000907	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 有持旭	4. 巻 3
2. 論文標題 独立以前のエストニアにおける風刺画家と発行物の相関	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 DNP文化振興財団 学術研究助成紀要 Vol. 3	6. 最初と最後の頁 10-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 有持旭
2. 発表標題 Parn's Humor: Talking in the Fog
3. 学会等名 Animafest Scanner 11（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 有持旭
2. 発表標題 エストニア芸術におけるアニメーション表現の潮流と今後の行方
3. 学会等名 日本映像学会第47回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 有持旭
2. 発表標題 エストニア芸術アカデミーのアニメーション演習を反映させた「構成的思考」による物語の作り方
3. 学会等名 日本映像学会中部支部研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 有持旭
2. 発表標題 独立以前のエストニアにおける風刺画家と発行物の相関
3. 学会等名 DNP文化振興財団 学術研究助成成果報告会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------